

論文

孫中山研究に関する中国学術の新動向

牛大勇

（訳 村田省一）

私は孫中山を研究する専門家ではないが、狭間直樹教授からのご厚意によるお招きと来賓各位の思いがけないご好意を受け、ここに謹んで、私がいささか知り得た中国学術界の孫中山研究に対する動向と最新成果について紹介させていただく。

1 中国近代の発展路線についての20余年来の論争：暴力革命か、漸進的改良か？

中国での改革開放の初期、学術界の思想は比較的活発であった。歴史上の改革と革命に対し、再検討を始めたのだ。北京大学の陳慶華教授は80年代初期の学術会議や南方での講義の中で、清末の革命派と立憲派に対し新たな評価を下された。今日ここに出席されている狭間教授も陳先生のこうした高論をかつて傾聴されている。私の記憶によれば、陳先生がその時表明された主要な観点は概述すると以下のようになる。

（1）清末の革命派は大勢が立ち上がり、党派も多く分かれ、指導者も多かった。孫中山とその追随者はその中の一つに過ぎなかった。後に彼は「正統」に祭り上げられ、その歴史的地位も日に日に高まっていったが、それには後代の

人が必要とした政治要素があったのである。

（2）孫中山本人も、元々は朝廷を通じての改革を考えており、「革命」とはいかなる意味なのかを知らなかった。後に新聞が孫のことを「革命党」と報じたのを見て、非常に意外に感じた程である。その時彼は急いで古代の典籍を調べ、「革命」の語が本来武王が紂を討伐し、天理人命に従ったことを指すと知って、これを素晴らしいと感じ、喜んで「革命」を受容したのである。

（3）孫中山を代表とする革命派と梁啓超の立憲派は同じく、一つの共通の目標を持っていた。すなわち中国の資本主義を発展させるという事である。彼らの分岐点は民主か専制かではなく、いかなる民主政体を選択するのかにあったのである。孫派は共和憲政を要求し、梁派は君主立憲を求めた。イギリスや日本等の実際の例から見取れるように、君主立憲は民主制度であるだけでなく、その後の中国資本主義の着実な発展にとって一層有利な政体となっていたかも知れない。

（4）しかし清王朝の態度は、実際には人々を失望させた。1910年前後になると、革命派が武装蜂起を起こしただけでなく、立憲派も次第に武装蜂起を準備し実行する様になった。四川の保路運動は正に立憲派が起こしたものであり、それは後に「四川全土に遍く広がった全民

蜂起」(呉玉章の語)に発展し、武昌蜂起を引き起こした。更に、立憲派はなお各地で一連の蜂起を策動し、遂には北京附近でも「首都革命」と称されるクーデターを計画した程であった。この策動は発覚して弾圧されたものの、改良立憲を主張していた一派までもが武装革命を求めていなかったわけではないという証明をすることができるだろう。

こうした観点は現在では既に中国学術界の主流の観点となっている。しかし当時は非常に新鮮な観点であった。惜しむらくは陳慶華先生は一貫して「述べれども作らず」の立場を貫き、この点について論著の発表をされなかった。しかし陳先生と同じ観点を持っていた黎澍先生や李時岳先生などがこうした観点について深い理論的総括を行い、立派に論述して文章化された。

中国近代史学研究的こうした傾向は、人類の発展は自然界の発展とは大いに異なる点があることを教えてくれている。人類社会の発展の経路は選択の可能性を有していて、人々自身が不断に選択していく中から自らの社会の発展を実現するものである。但しこうした選択は実際には幾重にも重なった複雑な要素の影響の下で達成されるのであり、一つの集団、政党、さらには個人などはどれも、実際の発展の選択を決定することが出来ない。純粋理性や学理上の論証ですら、発展の道筋を決める実際の選択は出来ない。なぜなら実際の発展に影響を与える可変的要素があまりに多すぎるからだ。このため、いかなる集団や個人も実際の発展に対しては意外性を感じることがあるのを禁じえない。そこで、「必然性」、はなはだしくは「宿命論」などを用いて歴史の発展について解釈しようとする

のである。

2 孫中山とソビエト・ロシアの関係についての近年の研究の新たな進展

ここ数年来の中國大陸における孫中山研究は常に新展開を見せている。その中でも楊天石先生主編『中国国民党史』はそれらの集大成と言える。この本の各巻は今続々と出版されている。私が最も関心のある孫中山の対外関係について言えば、李玉貞の書いた対ソ関係の巻が、新成果が最も顕著である。彼女は長年にわたりこの方面の研究に専念しており、1996年には台北の中央研究院から『孫中山与共產國際』を出している。現在既に脱稿し出版を待つばかりである国民党の対ソ関係についての彼女の新稿では、改めて彼女自身の研究の新成果をまとめている。

例えば、李は孫中山とロシアの革命家の最初の接触は1906年、日本の長崎と東京においてであったと述べている。当時の日本の思想界は比較的活発かつ寛容であり、孫はこの地でロシアの革命家であるラッセル¹、ゲルシュエニと接触した²。辛亥革命後、孫中山は国際的に更に注目を集める存在となり、1912年1月5日、レーニンの指導するロシア社会民主労働党はプラハ会議にて「中国革命に関する決議」を採択した。これはロシアの革命家たちが孫中山に送った最初の組織的声援であった。

李は「孫呉政府」と「西北計画」に対して更に独創的な研究をしている。以下、項目ごとに分けてこれを紹介したい。

3 孫中山の「孫呉政府」樹立に対する試み

周知の通り 1922 年に奉直戦争が起き、曹錕と呉佩孚が奉天派の張作霖を破って廃督裁兵を宣言し、和平統一を高唱した。政治改革の声は日に日に高まり、胡適や李大釗などは「好人政府」の結成を主張して呉佩孚との接触を始めた。しかし殆ど知られていない事であるが、この「好人政府」運動の背後でロシア人と孫中山の策謀があったのである。

ロシア外交官のホドロフ（А.Е.Ходоров）³は 5 月 16 日に李大釗の紹介を経て保定に到着し、呉と「主義上の濃密な談義」を行った⁴。孫中山もこの時、張継を呉佩孚の下に派遣して連絡を取っていた。呉佩孚はこの孫の代理人に向かって、新政府は「もし成立するとすれば、それは中山によってまとめられなければならない。」と説明した⁵。

1922 年夏、ソビエト・ロシアの駐華特命全権代表のヨッフエが北京に到着した。彼は北京政府と会談するのみならず、彼の助手で幾つもの職を兼ねていたマーリンを通じて孫中山と連絡をとった⁶。ヨッフエ自身は呉佩孚と孫中山にそれぞれ書簡を送り、彼ら二人に連合して組閣するように要請し、併せてヨッフエの外交上の使命を支持してくれるよう要請した⁷。ヨッフエの代理人ゲッケル（А.И.Геккер）⁸が呉佩孚を訪れた後、未来の新政府の権力分配はほぼ決定した。すなわち孫中山が総統、政府首脳を担当し、呉佩孚は軍事権を掌るというものである。ソビエト・ロシアの代表はこの報告をスターリンの下へと送った⁹。

孫中山は 6 月 6 日に「工兵計画宣言」を発

表し、呉と共同して「時局を救う」ことを希望すると表明した。呉佩孚も、1923 年春にクーロンに進軍して、その時になると親ソ的な孫呉政府は、ソビエト・ロシア軍が既に進入していた外モンゴルの問題に対して、ソビエト・ロシアに対して有利なように解決することができるかと応じた。それ以外に、この政府は反張作霖を前提にしており¹⁰、当時ソビエト・ロシアが中東鉄道に対し持っていた利権もまた保証されるはずであった。そのためヨッフエはマーリンを通じて孫呉に対し、ソビエト・ロシアとコミンテルンはこの樹立される新政府に対し支持を与えると表明した¹¹。

しかし 1923 年 2 月に呉佩孚が京漢鉄道の大ストライキを武力で弾圧した「二・七事件」が発生すると、ソビエト・ロシアとコミンテルン、中国共産党は呉佩孚に対し深く失望した。こうして孫呉が連立して樹立するはずだった「好人政府」の計画も破綻してしまった。

4 孫中山の「西北計画」実行への試み

1917 年のロシア三月革命後、早くも孫中山は中国西北部を通じてソビエト・ロシアと連絡することに関心を示していた¹²。1920 年、彼はロシア共産党（ボルシェビキ）中国人共産主義者中央組織局¹³の代表劉謙¹⁴と協議し、華南とロシア中部・極東の華人勢力を統一して共同で北京政府を打倒し、ロシア極東のブラゴヴェシチェンスクに指揮センターを設け、自らの軍隊を新疆に集結させることを目論んでいた¹⁵。

ヨッフエは来華後、正式に孫中山と「西北計

画」について協議した。ヨッフエの軍事参謀ゲッケルは1922年9月26日に孫中山と会見した。孫はソビエト・ロシアに国民党の建軍を援助し、また新疆を通じて通信機器や輜重、武器を搬入してくれるよう要請した¹⁶。10月頃、張継はソビエト・ロシアに対し「孫中山の要請に応じて」一個師団を新疆に進駐させてその地を占領するよう要請したが、孫本人も新疆に赴いて「ロシア、ドイツ、中国の合同会社」を設立して、資源を開発し、「一つの製鉄所と兵器工場を建設する」つもりであった。孫中山は最大限の譲歩をする準備すらあった。すなわち、ソビエト・ロシア軍が新疆に進駐した後は、「その地にいかなる社会制度を建設しても構わない、例えソビエト制度であっても構わない。」というものであった¹⁷。こうした状況はマーリンから直ちにヨッフエに伝達され、1922年末にはモスクワにも伝えられた¹⁸。

孫中山はこのために一つの遠大な計画を立てた。すなわち国民党の基地を中国の奥地であり「ムスリムの集住する」新疆に移して、ソ連と「密接かつ直接の連絡を保持する」便を図ろうというものであった。そうすれば「呉佩孚の支配地を経由せず」、直接「甘粛、寧夏等の省を経てその地の孫中山の10万の軍隊をモンゴルとの境界へと移動させる」ことができるというものであった。この計画の長所は、東南沿海方面で遭遇する可能性のある外国からの干渉を回避できる点にあった。

1923年3月8日、ロシア共産党中央委員会が開かれ、国民党に対し財政援助を行い建軍を援助し、さらに孫中山の同意を得た後に軍事顧問と政治顧問を派遣することが決定された¹⁹。

顧問を選ぶ作業はただちに開始された²⁰。

5月1日、東京にいたヨッフエはマーリンを通じて孫中山に、ソ連は国民党に対し「200万ルーブルを提供して、中国統一と民族独立を勝ち取る工作の準備の用とする。」、さらに国民党が「中国北方や西部の省に一大作戦部門を樹立する」ことに協力する準備があり、ソ連は「8000丁の日本の歩兵銃、4門の砲と二両の装甲車」を提供でき、国民党はこうした武器と訓練員を使って、兵種の内部学校を含む非野戦部隊を設立できる、と伝えた。「これにより、北部と西部の革命軍のために政治と軍事の訓練班を開設する条件が整う²¹。」

こうした背景から、孫中山は蒋介石をリーダーとして沈定一、王登雲や張太雷を組織させた「孫逸仙博士視察団」を8月16日に上海から派遣し、視察団は9月2日にはモスクワに到着した²²。

蒋介石一行は9月9日に、ソ連革命軍事委員会主席スクリャンスキーと赤軍総司令カーメネフに対し、国民党の西北計画の要点を説明した。すなわち、国民党は華中華南において外国人が盤踞する二大拠点、上海と香港を避け、活動の中心を西北に移す。そして庫倫以南の中蒙境界に近い所で、ソ連赤軍の様式を参考にして孫中山の新軍を創る、この一帯の国境内外の中国人が兵士の供給源である、と党は決定した、と²³。後に蒋介石は孫の意図を「代表団意見書」に詳述し、ソ連とコミンテルンの指導者に渡した²⁴。

「意見書」内の各項の要求は、一つも肯定的な回答を得られなかった。当時、モンゴル人民共和国成立と言う事件が発生したためである。

外モンゴル問題はソビエト・ロシアと北京政府との間で障碍だったのみならず、孫中山の西北計画にとっても障碍だったのである。

1920年7月、ロシア共産党（ボルシェビキ）中央委員会はイルクーツクに西シベリア局東方民族部を設立した。モンゴル人民党はチョイバルサンとダンザンを指導者とする代表団を1920年8月末からモスクワに派遣し、彼らは東方民族部の責任者ガボンと面会した²⁵。1921年1月、ガボンは彼らが外モンゴルで、ブリヤート、カルムイク、トヴァなどの各民族を含む1000人程度の部隊を組織することを援助した。ソビエト・ロシア政府が以前約束していた15万ルーブルと武器の援助はこの時実行された²⁶。その後、モンゴル人民共和国の樹立が宣言され、ダンザンが政府財政部長とモンゴル人民党主席についた²⁷。

中国国民党は外モンゴルの帰属問題については北京政府と立場を同じくしており、ソビエト・ロシアは外モンゴル政策を再考せざるを得なくなった。ダンザンは1923年秋、モンゴル人民党中央委員会から北京に派遣された²⁸。

孫中山の目標は明らかであった。すなわち西北計画の実現に引き続き取り組み、ソ連に隣接したモンゴルで軍隊を組織して北京政府を打倒するというものである。そのためこの微妙な背景の中で、国民党もダンザンを連絡の対象とした。白雲梯は国民党の臨時中央執行委員会委員であったが、孫中山の指示で内モンゴル革命運動の責任者の地位に就いていた。彼は1923年末に国民党を代表してダンザンと会談を行った。二人は「誰が内モンゴルの革命運動を指導すべきか」と言う問題をめぐって意見が対立

した。ダンザンは、内外モンゴルは接続しており、しかも外モンゴルで既に革命が実現した以上、当然外モンゴルがこの地域の指導者になるべきだと主張した。白雲梯は、内モンゴルは中国の領土として不可分な地域であり、この地域を指導するのは国民党以外には有り得ないと強調した²⁹。

ソビエト・ロシアはヨッフエの代わりに新たに外交代表カラハンを派遣し、彼はこの両者と密接な連絡を保ち、さらに広州にいたボロディン（М.М.Бородин）ともすぐに情報を交換した。国民党は外モンゴルの独立を承認せず、蒋介石もモスクワでソビエト・ロシアの党と政府の指導者に向かって明確かつ厳粛な態度を表明していた³⁰。

カラハンはこの問題について国民党の態度を転換させることができないことを知り、入念に計画を立てて孫中山に西北計画を断念させるよう試みた。彼は一方でボロディンを通じて孫中山に、中国に優れた政府が成立すれば、「モンゴル人も一定の自治原則を基礎として中国に戻るはずである。」と説き、一方、北京ではダンザンに対し、孫中山から「モンゴル国内もしくはクーロンのどこかで国民党の軍隊を組織して北京政府を倒す」ことを持ちかけられた際に、ダンザン側からは「いかなる回答も」しない、さらに「これはモンゴル政府の事である以上、モンゴル政府と討議しなければならない、したがってダンザン自身では回答できない、と特に釈明する」ように要請した³¹。

1924年1月、中国国民党が広州にて第一回全国代表大会を開いたとき、ダンザンは広州を訪れて孫中山と会見し、カラハンの意図に忠実

な形で意見を表明した³²。こうして、国民党の西北計画は空文と化したのである。

私は孫中山研究の近況についてはあまり通じておらず、本日の時間も限られているので、上述の紹介に留めさせていただきたい。

牛大勇 (NIU Dayong, 北京大学歴史系教授)
村田省一 (MURATA Shoichi, 神戸大学大学院)

注：

1 Н.К.Руссель, Ратцел.『民報』は拉錫爾と訳す。原名スジロフスキー。詳細は李玉貞『孫中山与共産國際』台北中央研究院出版、1996年、pp. 11-12.; А.Н.Хейфец Революционные связи русского и китайского народов в начале XX века *Вопросы истории*, N. 12, 1956, стр. 96-98.

2 『民報』第四期、pp. 93-94.『孫中山与共産國際』pp. 12-13.

3 А.Е.Ходоров (1886 ~ 1949) は、1919年から1922年までロスタ極東通信社駐北京代表であった。1923年から東方商会副主席となり、1924年から科学教育に従事した。ソ連の大粛清期に迫害され、後に名誉回復された。

4 中国社会科学院近代史研究所編『白堅武日記』江蘇古籍出版社、1989年、pp. 360,361,368.

5 同上 p. 368. この書簡の全文は未見。

6 マーリンはこの来華の際に、多くの身分を有していた。李玉貞『馬林伝』中央編訳出版社、2002年、p. 164. を参照。

7 ヨッフエは孫中山が呉佩孚を警戒していることを

知っていた。なぜなら呉佩孚は陳炯明を支持していたからである。李玉貞主編『馬林与第一次国共合作』光明日報出版社、1989年、pp. 85,86,89. ヨッフエと孫中山、呉佩孚間のやり取りについては李玉貞訳、郭恒鈺、Titarenko (基塔連科) 等編『聯共、共産國際与中国』台北東大図書公司、1997年、第24、25、27、36、40、43、47、48号文件。

8 А. Е. Геккел (1888 ~ 1938) はソ連の高級軍人で、トビリシ生まれ。1917年にロシア共産党(ボルシェビキ)に入党、1918年に赤軍に参加し、1月から第8集団軍司令員となり、4月にロシア南部共和国武装部隊の最高統率部参謀長となった。内戦期にはグルジア解放で戦功を立てた。トルコに赴いて現地の革命運動に参加し、帰国後はソビエト・ロシアの軍幹部養成に多大な貢献を為した。1922年7月、ヨッフエに随行して中国に赴き、武官を担当した。在華期間中に呉佩孚や孫中山とは幾度も接触し、軍事協力について協議した。1929年から1933年にかけて駐トルコ武官となり、1934年にソ連総参謀部に赴き指導的役割を果たした。また赤旗勲章を授与された。1938年に誤って殺害され、後に名誉回復された。

9 「越飛致加拉罕的信(1922年8月25日)」(『聯共、共産國際与中国』第一巻、pp. 79-80.) 孫呉連携の過程と結果の詳細については『孫中山与共産國際』pp. 175-192. を参照。

10 孫中山とコミンテルン代表マーリンとの間には、張作霖の見方を巡って相違があった。『馬林与第一次国共合作』pp. 101-102. また、РГАСПИ, ф. 514, оп. 1, д. 46, л. 51-65. にマーリンが張作霖を訪問した際の報告がある。この中で彼はソ連は張作霖を利用できると考えており、張作霖を根からの「親日派」とは言えないとしている。

11 「越飛致馬林的信(1922年9月18日)」(『馬林与

第一次国共合作』pp. 100-102.)

12 孫中山「批朱某(朱和中的ことか、著者註)函(1917年3月27日)」(広東省社会科学院歴史研究室等編『孫中山全集』第四巻、中華書局、1981年、p. 22.)

13 これはロシア共産党(ボ)中央委員会に統括された在ロシア中国人共産主義者の組織で、1920年6月の旅俄華工聯合会第3次代表大会にて成立した。1920年7月1日、ロシア共産党(ボ)中央委員会が批准した。その中国語の名称である「莫斯科共産党総籌辦処」は、明確にその使命を表していた。すなわちこの局を中心として中国本土に党員を派遣し、共産主義組織を設立するというものである。この機関の発刊物は『震東報』(Пробуждение Востока)で、「中華民國9年8月」に創刊号が出された。*Новая и Новейшая история* 1959, No.5, p. 144.; А. А. Стручков, Б. М. Устинов, *Яркое проявление пролетарского интернационализма, Советское китаеведение*, 1958, N4, СТР.26-28. 档案調査を経たところ、この局の書記は安龍鶴であった。Ан Ненхак РГАСПИ, ф. 5, оп. 3, д. 7, л. 20.

14 変名 Федор Федорович (ヒョードル・ヒョードルウィチ)、生年不詳。1920年にロシア共産党(ボ)アムール州委中国部書記となった。この年、中ソ国境地帯に移動した際、中国領内にて殺害された。

15 「劉謙向俄共(布)阿穆尔州委的報告(1920年10月5日)」『聯共、共産国際与中国』第一巻、pp. 22-24.

16 討論の状況については『聯共、共産国際与中国』第一巻、pp. 104-106. を参照。

17 「越飛致契切林的電報(1922年11月7・8日)」『聯共、共産国際与中国』第一巻、pp. 116-117.

18 マーリンはヨッフエの助手として、ロシア共産党に対し中ソ関係やソビエト・ロシアの対外モンゴル政策、中東鉄道に関する政策について指示を請い、モス

クワに戻ってスターリンの接見を受けた。しかしこの時の会談の具体的内容は後日の調査を待たねばならない。今まで見つかったのは僅かにプハーリンがスターリン宛に書いたメモのみである。『馬林与第一次国共合作』p. 108. を参照。

19 「俄共(布)中央委員会會議記録第53号(1923年3月8日)」『聯共、共産国際与中国』第一巻、p. 183.

20 А. И. Черепанов, *Записки военного советника в Китае*, Москва, Наука, 1976, СТР.20-22.

21 馬林「収越飛本年5月1日熱海來電」『馬林与第一次国共合作』pp. 170-171.

22 蘇俄外交人民委員部遠東司翻譯「巴蘭諾夫斯基就国民党代表团会見魯祖塔克事提交的報告(1923年9月7日)」『聯共、共産国際与中国』第一巻、pp. 234-236.

23 同上。

24 毛思誠編『民国十五年以前之蒋介石先生』第五冊龍門書店、1936年、p. 51. を参照。

25 РГАСПИ, ф. 495, оп. 154, д. 105, л. 1, これは『民国十五年以前之蒋介石先生』第五冊 p. 91. より引用。

26 同上、p. 105.

27 同上、p. 102.

28 機密保持の為、ダンザンの公開身分は中華民國の新総統に当選した曹錕を訪問する、というものであった。事実上彼がこの北京行に際して情報収集を行う目的は、外モンゴルが「中国に対し独立的な政策を取るために採られていた一つの重要な政治的措施」であった。彼は奉天、広州、北京、上海を訪問した。

29 С. Г. Лузянин, *Россия-Монголия-Китай в первой половине XX в. : политические взаимоотношения в 1911-1946 гг.*, Москва, Институт Дальнего Востока РАН, 2000, СТР. 111.

30 「1923年12月16日鮑羅庭与瞿秋白的談話記錄(1923年12月16日)」『聯共、共産国際与中国』第一

卷 p. 311.

31 「1923 年 12 月 27 日加拉罕致鮑羅庭信 (1923 年

12 月 27 日)」『聯共、共產國際与中国』第一卷、p. 317.

32 『民国日報 (上海)』1924 年 1 月 28 日。



李玉貞『馬林傳』中央編譯出版社、2002 年

中国社会科学院
近代史研究所 李玉贞(主编)
马列主义毛泽东思想研究所 杜魏华(副主编)

光明日报出版社

馬林與第一次國共合作
屈武題

李玉貞主編『馬林与第一次国共合作』

光明日報出版社、1989 年